



石狩のカワラナデシコ観察会

日野間 彰

平成2年7月8日、バスに乗って石狩町へ。26名の会員が集まった集合地点にはまだ春の匂いの残る涼しい風が頬をよぎり、飛ばされる砂が私の靴の中にしのび込んでくる。原先生の挨拶と今日の予定を聞いたあと海に向けて歩いてみると、淡いピンクのハマヒルガオ、黄色い花をつけたコウゾリナ、ハマニガナ、ブタナ、アキノノゲシなどが目にはいり、ハマエンドウには5cmくらいの豆がつき、ハマニンニクの直立した花穂が風に揺られて涼しげに踊っている。ハマエンドウの花をつけているものも後にみつけた。突然岩見沢の村上先生が「ハマニンニクの根にはニンニクがついているのか」と難しい質問をする。原先生が「葉がニンニクに似ているのだ」と適切な回答をする。私ならせいぜい「そういう話は聞いたことがありません」と丁寧に答える程度か。前の方では会員の美女たちがハマヒルガオと競演する。天気はやや曇り、暖かななかの風が気持ちいい。きのう海開きが行われたという。午前のせいか人はそんなに多くない。バスも心配した渋滞に巻き込まれることはなかった。

しばし植物のことを。道沿いには、大きな花穂と実をつけたコウボウムギ（雌雄異株）、雄はすでにうなだれ雌だけがたくましくたわわな実をつけているコウボウシバ、数は少ないものの白い花を目立たせているハマボウフウ、花の時期を終え黄緑～オレンジ色の実がみえるハマナスなど。ハ

マナスの背は10～20cm程度と低くカーペット状に広がっており、砂があまり安定しておらず栄養状態がよくないためかと思われた。アキノノゲシは剣のように鋭い葉が特徴的。ハマハタザオは、よく見ないと気がつかないが、果実の密集して束になって立っている様子がおもしろく、おもわず指でつまんで引き上げてしまいたくなる。

そろそろ会員たちの挙動がおかしくなる。金上某と笈田某のふたりがハマニンニクの実をたたいてほこりを出し、私にあてつけて「ホコリダラケ」。福地某は五十嵐氏に向かって「私のことをガニマタのカモシカなどというのはインケン男にきまっている」。

だんだんと気温が上がっていくにつれ車が多くなりほこりっぽくなってきた。

防風林にはアキグミにまじってイタチハギが植えられている。イタチハギの花はほぼ最盛期であるがそんなにめだたない。

11時40分。おめあてのカワラナデシコの群落を発見する。満開。尾山、星野、奈良岡、安孫子の各氏がルーベを手に観察を始める。花にチョコビゲが生えているとの声に、女性陣しばしヒゲの観察に熱中する。はじめ、カワラナデシコはともかくヤマトナデシコはどこにいるのかと思っていたが、ヒゲがあると聞いて、女性陣はやはりみんなヤマトナデシコなのかとうなずく。紫色のクサフジが咲き、ハマナスのよい香がまわりをつつむ。「メマツヨイグサの“メ”はどのような字を書くの？」福地某が質問。原先生いわく「女の意味で、昔の女性がかわいくて小さかったことに由来している。」そうともそうとも。

このあと、小さな沼まで歩いて昼食をとり解散する。その間に見られた植物を概観すると、

コメツブウマゴヤシ、コシカギク、シナガワハギ、シロバナシナガワハギ、ブタナ、メマツヨイグサ、シロツメクサ、アカツメクサ、ヒメジョオン、カモガヤ、ヘラオオバコなど。帰化植物がめだつ。沼ではヘラオモダカ、サジオモダカ、ヒメガマ、ジョウロウスゲなどの観察を行い、原先生の説明を受けた。とくに、ジョウロウスゲの名が“上□”という高貴な女性を意味する言葉に由来しているとの話は印象に残った。